

州立カリフォルニア大学ロサンゼルス分校。略称の UCLA の方が通りがいい。名門校である。黒川清氏は、その医学部の正教授である。昭和十一年生れ。氏が東大助手をやめてアメリカへ渡ったのは、昭和四十四年のことである。折から日本では学園紛争などがあり、いっそ二、三年、アメリカで基礎的な勉強をして来よう、と思った。まず東部のペンシルバニア大学でフェローとして二年間の研修をすませ、次に西海岸に移って、臨床の勉強をしようと、UCLA に来た。そして、そこでそのまま十年余を過すことになった。日本からは、年々、多数の人が医学研究のため渡米しているが、一流大学で正教授になっている例は、数えるほどしかない。日本人に門戸を閉ざしているわけではないが、正教授をめざす競争はあまりにも熾烈（しれつ）であり、多くの日本人には耐えられないからである。ただし、単なる研究者としてとどまることは、それほど難しくはない。日本人はまじめで、おとなしく、給与について文句をいわない。いずれ帰国するから就職のあっせんをする必要がない・・・等々、ボスであるアメリカ人教授にとっては、日本人はむしろ重宝な助手という面がある。企業の世界でも同じだが、アメリカではボスとのつながりが強く、ボスとの縦の関係で人事が決まる。このため、研究者は安泰を望めば、できるだけボスに気に入られようとし、また、ボスをおびやかさないようにする。ただし、その場合は、半永久的にボスの付属品となることを覚悟しなくてはならない。ボスの気まぐれによって、どうなるかわからず、ボスに異動があれば、それにつれて引き上げられることもあるし、逆に巻き添えにされてはじき出されたりもする。それに、ボスに忠誠をつくしたからといって、報われるとは限らない。そうしたとき、最後にたよりになるのは、自分の実力であろう。

ある日、黒川氏は信ずるところに従って、思いきってボスに注文をつけてみた。「教授名で発表する論文の中に、貢献した自分の名を明記してくれ」と。逆鱗（げきりん）にふれるか、にぎりつぶされるかと思ったが、意外にも、難なくそれが受け入れられた。黙っていることはない、理のあることはいってみることだ、と黒川氏は思った。ただし、一方では、自分に力をつけておかねばならない。黒川氏は、難しいといわれる臨床医の国家試験をパス、さらに専門医になった。専攻する腎臓の機能と代謝の研究について、次々に論文を書いた。質の高い論文を、できるだけ数多く書く。質も量も必要なのだ。しかも、それをわかりやすく、説得力のあるものにしなくてはならない。実験をくり返しては、書き直した。発表する医学雑誌も、一流のものを目指した。もつとも、そうした雑誌には膨大な数の論文が集まるため、不掲載になることが多い。その場合には、三つの選択がある。

- 一、 あきらめるか
- 二、 編集部の意見に従って、実験をやり直して書き改めるか
- 三、 一つ下のランクの雑誌に持って行くか

黒川氏は、二と三を選んだ。納得が行けば、書き直しをする。それに仮りに二流の雑誌でもいいから、とにかく読まれたいときには、そちらへ持って行く。決してあきらめるということはしなかった。とにかく押して行く。やがて、黒川氏の論文は、最も権威のある科学雑誌「ネイチュア」にもものるようになった。

黒川氏は、やがて学生などを教えるようにもなった。UCLA の医学部には、全米から優秀な学生が選抜されてきている。このため、容赦なく鋭い質問を浴びせかけてくる。もっともな質問は、自分の勉強材料としてとりこむ。講義では、程度の高いことを理解できるように話さなくてはならない。講義ぶりについて学生からの評価が出される。最初は、「ドクター黒川の言葉がわからない。あれは日本語ではないのか」などという批評もあって、氏を苦笑させた。早口なのと、アクセントに問題があったと反省し、これをあらためた。フェローやレジデントを相手に講義するときには、講義内容も話し方も変えねばならない。「教えることはたいへんです。戦争のようなものです」と黒川氏。異国での研究や臨床。そのひとつだけでもたいへんである。多くの日本人は助手的な研究者にとどまるか、あるいは開業医になった。研究と臨床を両立させ、さらに講義を消化するため、黒川氏にとっては忙しい日々が続いた。その上、同僚とのつきあいも大切である。ときには家に招いて、夫人の手料理でごちそうしなくてはならない。それでいて、「アメリカでは、面倒を見てやったから面倒を見てくれる、と思っってはならない。よくしてやったから、よくしてくれる、と思うな」ということを承知していなくてはならない。研究費を集めることも、教授の仕事である。それには、その研究がいま、なぜ必要かということ、広く説得しなければならない。金がなければ、部下は苦勞するし、チームが組めないこともあるからである。気力も体力も、押しも根気も、必要であった。

UCLA は、いまやロサンゼルス名物のひとつ。その門前町とでもいうべき一帯には、周囲が高級住宅地というせいもあって、しゃれたレストランや店が軒を並べ、ファッション・ブックからぬけ出たような男女が歩いている。観光バスから下りる日本の若者たちは、UCLA の名入りのウェアや土産物がお目当てである。濃い緑と深い木立、色とりどりの花々。大学の構内は広い。ゆるやかな起伏の続く中に、ところどころ校舎が建っており、うっかりすると道に迷って帰れなくなりそうである。「位（くらい）負け」という言葉があるが、わたしなどには一種の圧迫感もあって、こうしたところでよくぞまあ、と感心してしま

う。氏はさらに大学の隣りに在る復員兵用の病院（ベテランズ・ホスピタル）の医長の一人である。アメリカ政府の復員兵への優遇ぶりを如実に示す施設で、広大な UCLA のキャンパスよりもさらに広い敷地に、ゆったりスペースをとった大病院が静まり返っている。高層に在る氏の部屋からは、はるかに太平洋が光って見えた。

黒川教授の家は、大学から少し離れた丘陵地帯に在る。ときにはコヨーテやガラガラ蛇も現われるというほど、まだ大自然が残っている斜面に、大きな家が点在する。空は青く、風はさわやか。庭にはプール、そして秋田犬が二頭。夫人は、たのまれてロサンゼルス日本人高校の先生をしている。かつては受験戦争におくれをとるまいとして、中学生ぐらいになると子供を日本へ帰すのがふつうであった。このため、一時は全校で四人というところまで生徒数は減った。それが、いまでは百七十人になっている。在外子女のため特別枠での入学を認める日本の大学が出てきたため、おかげで、現地で両親といっしょに腰を落着けて勉強できるようになっている。（これはわたしなども望んできたことでうれしいのだが、問題はこの制度を悪用するケースが出てきたことである。つまり、親が海外に居るわけでもないのに、できのわるい子供だけをわざわざ外地へ送って特別枠を利用させようというもので、これでは、かんじんの在外子女が救われなくなる。早急な対策を文部省あたりで考えて欲しい）快適そうな家だが、氏が在宅するのは日曜日だけ。それも論文書きで終る。その他の日は毎日朝八時から夜九時まで、大学か病院に。ただひとつの気ばらしであるゴルフも、このごろは年に二、三度。東大出身者のゴルフコンペがあり、日本企業の代表たちと会って募金をたのむには、いい機会なのだが。広大な UCLA のキャンパスにも、緑の中の美邸にも、シャープな感じの長身の氏はよく似合った。南カリフォルニアの風景の中にとけこんでいるように見えたのだが、昨年、母校の教授に欠員ができたとき、氏は候補者の一人に推され、帰国の可能性が出てきた。最終的には選に漏れたが、その直後、UCLA の医学部長が親書を送ってきた。「落選おめでとう。あなたがここにとどまることになって、われわれは心よりよろこんでいる。」と。